

第三回ローザンヌ世界宣教会議

日本ローザンヌ委員会、関西ミッションリサーチセンター

正木牧人

2010年は21世紀の世界宣教を考える大切な年となった。1910年にスコットランドのエジンバラで開かれた宣教会議は20世紀の世界宣教とエキュメニカル（世界教会一致）運動に多大な影響を与えたが、2010年はその100周年にあたる。

世界ではこれを記念する様々な宣教会議が開かれた。6月2日から6日まで世界教会協議会がエジンバラ2010会議を主催した。そして10月16日から25日にローザンヌ世界宣教委員会が第三回ローザンヌ世界宣教会議を南アフリカのケープタウンで開催した。

アフリカでの開催はこの100年の世界の状況の変化を反映するものとして興味深い。アフリカ大陸のクリスチヤン人口はこの100年に全人口の9%の1千万人から46%の3億6千万人に増加、2025年には全世界のクリスチヤン人口の半分がアフリカと中南米で占められるといわれている。

第三回ローザンヌ世界宣教会議の概要と参加者

【概要】

第三回ローザンヌ世界宣教会議は南アフリカ・ケープタウンの国際会議場にて2010年10月16日から10月25日まで、ふたつの日曜日を含んだ日程で開催された。ローザンヌ運動が世界福音同盟の協力を得て開催した初めての宣教会議である。世界198カ国から集まった4200人が、全世界に全教会でキリストの福音のすべてを宣べ伝える決意を表明した。

【目的】

同会議の目的は触媒のような働きをして世界の教会を励まし、協力して世界宣教を推進することにある。準備から会議までのプロセスを大切にし、会期中には参加者と世界96カ国700カ所に集う10万人規模の人々がインターネットの「グローバルリンク」で結ばれた。このようなネットワークによって、世界が知り合い、実際の宣教課題を認識し、協力して宣教計画を立案・実施することが可能となる。

【参加者】

今回4000人の参加枠に対して、三倍以上の申し込みや推薦があった。参加者選定委員会は世界の教会から人口的、神学的、文化的な現実に沿う代表が出席できるように、また年齢、性別、神学者と実践者、諸団体と教会、教職者と信徒というような様々な要素のバランスを考慮して選別した。

世界を12地区に分け、更に各国に推薦委員会を置いてきめ細かな配慮をしながら、各

国々のクリスチヤン人口比率をもとに、60%が50歳以下、35%が女性、10%が信徒となるように代表者数を指定、これに地理的ひろがり、民族的多様性、教派的バランス、働きの場の種類などを加味し、1200人が宣教師、1200人が牧師、1200人が神学校教師、600人が信徒リーダーという構成で、35%が主要国以外からの参加者になるように選んだ。4200人の参加者、1200人のスタッフやボランティアからなる大きな大会となった。

【日本からの参加者】

日本では日本ローザンヌ委員会が約2年をかけて代表枠の交渉や参加者推薦にあたった。日本ローザンヌ委員会は、2008年12月に再発足し、以来委員長に金本悟氏、副委員長兼会計に末松隆太郎氏、国際書記に正木牧人、委員にディル・リトル氏、中台孝雄氏、永井敏夫氏、顧問に有木義岳氏、信徒委員に根田祥一氏、オブザーバーに具志堅聖氏があたってきた。のちに神学委員として西岡義行氏、世界ローザンヌ運動の青年責任者のマイケル・オ一氏が委員に加わった。

日本からの参加者は最終的に三五名になり、順不同で植木英次氏、竿代照夫氏、末松隆太郎氏、永井敏夫氏、永井信義氏、金井悟氏、渡真利彦文氏、西岡義行氏、錦織寛氏、藤原敦賀氏、大坂太郎氏、渡辺聰氏、鈴木ポール氏、青木勝氏、倉沢正則氏、中台孝雄氏、吉田隆氏、山中猛士氏、山中先代氏、ウイリアム・ウッド氏、福井誠氏、米内宏明氏、市村和夫氏、柳沢美登里氏、渡部信氏、福田崇氏、清水坦氏、吉本牧人氏、鎌野直人氏、藤野ゲイリー氏、大田裕作氏、黒田摂氏、松崎ひかり氏、杉本玲子氏、正木牧人である。そのほかに、ジャーナリストの根田祥一氏とクリスチャントゥーデーの方、音楽の高菜美香氏、青年部のマイケル・オ一氏、来賓の有賀喜一氏、ボランティアの立石充子氏、スタッフのジョナサン・コール氏、オブザーバーの松浩二氏らが参加した。

第三回ローザンヌ世界宣教会議のプログラムの流れ

【リズム】

朝の講演、午後の対話集会、夜の大会という枠組みのシンプルさがリズムを作り、出会いや学び、情報や語り合いの豊かさを楽しく吸収できた会議であった。その中で最優先していたのは毎朝の御言葉の学びのときであった。

【朝の御言葉】

エペソ人への手紙を会期中に少しずつ読み進める。毎朝8時30分からの音楽と祈りに続く8時45分から10時15分までの90分の全体集会Ⅰが御言葉の学びと分かれ合いに充てられた。参加者はそれぞれ自分のテーブルに座っている。壇上でまず朗読者がその日の箇所を読む。司会者がその日の箇所の観察のポイントを告げる。ひとりひとりがその日の箇所をもう一度默読によって学ぶ。観察したことを自分のテーブルごとに分かれ合い理解を深める。20分間の示唆に富んだ聖書講解説教を聞く。しばらくの時間、それぞれが教えられたことを書き留める。教えられたことをグループで分かれ合う。最後に共に祈

る。朝の御言葉の学びと分かれ合いが、その日すべてを貫くメッセージとしてひとりひとりの心に留まった。

【一日一項目】

第三回ローザンヌ世界宣教会議のミッションは、「私たちの世代の教会を世界宣教へと力づけ、わくわくさせ、そのための道具を与えること、そしてクリスチャンが公的な社会問題に取り組むという責任をしっかり果たすように励ますこと」である。午前11時から12時30分までが全体集会Ⅰで、取り上げるテーマは慎重に選ばれた。世界の12の地区でそれぞれ直面している宣教の課題を持ち寄って3年にわたって検討する中で、共通する6つの課題が浮きってきた。これらを1日に1項目ずつ深めていく仕組みで全体が流れしていく。その日のテーマは午後の時間に関心分野に分かれて掘り下げられる。24の分科会が午後2時から3時30分に、150以上に及ぶ討論集会が4時から5時30分に提供される。

【夜の全体集会】

夜は7時30分から9時15分までの全体集会が開かれた。アジア、中東、中南米とカリブ諸島、アフリカ、ユーラシア、欧米の教会が取り上げられ、その土地で福音の広がっていく歴史をたどりながら、神の器として用いられた人物を紹介する。教会が直面している問題を選んで、臨場感豊かに紹介される。人々の生きる文脈の中で神がどのように働いて下さるか、God is on the Move という文字が浮かぶステージ背景にドラマや視覚美術やスピーチを用いたプレゼンテーションが短い間隔で次々につながるので、時間のたつのを忘れ引き込まれていく。素晴らしい神のみわざを見ると同時に、人々の破綻や疎外の苦しみの現実を目の当たりにし、テーブル毎に祈る時をもつ。その日のテーマがさりげなく取り上げられており、神が現実に世界で、また教会で働いておられることを味わう。

【Offの日】

21日の中日には参加自由の施設ツアーや勉強会があり、エイズ、貧困、青少年の育成など南アフリカでの取り組みを視察・体験した。

第三回ローザンヌ世界宣教会議の内容

【会議の内容】

時間の横軸と内容の縦軸を巧みに織り込んだプログラムは、六日間の稼働日にテーマを一つずつ取り扱った。ローザンヌ運動の自覚する宣教のチャレンジ、「全福音を、全世界へ、全教会が」の三項目を、それぞれ二つの側面から取り上げたテーマをここで見ていこう。

会議を終えて参加者は、救い主はキリストだけ、と確信し、謙遜になって、苦しみの神学を捕らえ直して福音宣教に共に励もう、と促された。

■全福音■キリストの独自性 多元化した世界にキリストの真理をもたらす

21世紀は相対主義、多元主義の時代、またポストモダンの思潮が徐々に世を支配する。これまでキリスト教宣教と重ねてみられることもあった西洋霸権主義は嫌悪され、諸宗教や無神論が力を増し、平和共生の新しい秩序は見出されない。特に同時多発テロ以降、世界の知識層は「真理」を主張する宗教を原理主義的であるとして問題視する。ポストモダンの時代に「絶対的真理」が攻撃されている。

それでも私たちは、主イエス・キリストだけが救い主であるという真理に堅く立つ。既存の権威に挑戦がなげかけられている今日、神の言葉である聖書の権威を、人を支配し操作する人間の権威と区別して主張するのである。

真理は誰にも所有できず、汗して追求し続けるものだとして、諸大学では学生伝道の機会が奪われつつある。キリストのみが救い主であることを表明しよう。

■全福音■苦しみの神学 分断され破壊された世界にキリストの平和と和解をもたらす

「苦しみの神学」を樹立する必要がある。貧しさやテロリズム、エイズ、危機に瀕する児童など、苦しみの現実を放置しない神学である。

福音が急速に進展していると見られる地域でいわゆる「繁栄の神学」が猛威をふるっている。これは異端的な教えで、私たちが信仰によって世の権力や財産、健康などを手に入れて、成功した人生を満喫できると教え、麻薬のように現実感覚を麻痺させる。

「繁栄の神学」は世界に存在する痛み・苦しみを否定する。私たちはむしろ痛みや苦しみの現実を受け止めつつその中でキリストを指し示す「十字架の神学」を私たちの神学的確信としよう。

■全世界■世界の他宗教 他宗教の信仰を持つ人々にキリストの愛を証しする

世界の他宗教との関わりを考える。

1910年ころには、キリスト教宣教が進むにつれて他宗教は衰退すると思われていた。また、1974年ごろに問題とされたのは、宗教でなく世俗化であった。

現在は、国粹主義的な原理主義運動が各地に起こり、それが宗教的価値と容易に結びつく時代である。西洋社会の相対的な位置低下に伴い、たとえばイスラム世界が勢力を伸ばす傾向はまだしばらく続くであろう。この現実の中で、私たちは他宗教の人々と共生を図りつつ、同時にどのように福音を伝道していくのか。他宗教を否定し敵視するというではなく、友情をもって信頼関係を形成し、その中で人格的に主イエス・キリストの救いを伝えていこう。

■全世界■終わっていない使命 キリストの御旨にかなう優先課題

どの分野で宣教活動がまだ行き届いていないのだろう。諸宗教への宣教、心身障害者、文字ではなく聞くことで学ぶ人々、都市に住む人、ディアスポラ、難民、移民、危機にいる女性や子ども、青年層への宣教、環境問題の取り組みなど、課題は多い。私たちは宣教課題の優先順位を見極めた教会形成を目指そう。これらの働きには忍耐と創造性が求めら

れる。

たとえば、ディアスボラ宣教は、難民、留学、海外派遣、旅行などで海外に行く日本人や帰国者への伝道、海外から来て日本にいる在留異国人の人々への伝道に取り組む。日本の教会は家庭的というよさを持つが、それを伝道の優先順位に留意して宣教のために用いる視点がないと、むしろ教会を閉鎖的な中産階級的集団として固定してしまいかねない。

また、文字でなく聞くことで学ぶ人々には、従来から聖書翻訳の働きが進められているのだが、翻訳の完成を手をこまねいて待つだけではなく、宣教の働きの分野は創造的に作り出すことができる。たとえば、彼らのために聖書の語り部を養成してチームで派遣する働きが開発され、成果をあげている。

■全教会■教会の悔い改め 謙遜・誠実・簡素へのキリストの教会の召命

百年前には世界で取るに足りない存在だった福音派諸教会は、いまや無視できないまでの規模になっているが、そこに高慢や分裂・分派、不健全な支配的体質が入り込んでいることが指摘された。今日、宣教を困難にしている理由は教会自身にある。全教会が純粋さ、きよさの点で罪の悔改めを迫られている。謙遜・誠実・簡素 Humility, Integrity, Simplicity という HIS を持とう。

世は、キリスト者をそのメッセージの内容ではなく、語るように生きていない偽善を見抜いて軽蔑する。「ケープタウン決意表明」の起草責任者であるクリストファー・ライト神学委員長は、聖書から離れている、自分の繁栄のみを望む、偽りの教えが放置されているなど、21世紀の教会と16世紀宗教改革前夜の教会の類似点を指摘する。

■全教会■世界的教会の新均衡 新しい世界バランスの中でキリストの体なる教会の新しい連携

教会は世界にまたがるキリストの体である。次世代のキリスト教世界はどんな姿だろうか。そのときには西洋社会が世界を牽引する時代とは違う顔をもっているであろう。新しい時代に向かっていかに新しい相互関係とバランスを築くかが課題である。いわゆる北から南への移行は早くまた劇的だが、それは必ずしもどこでも一様に起こっているわけではない。この百年で世界のリーダシップや立場が西欧から非西欧へ、北から南へ移りつつあるにもかかわらず、富や教育などはそれらにふさわしい均衡になっていない。経済的資源、権力、施設、言語、科学技術などの新しい平衡を共に求めていこう。

思わぬ出来事を通して

1. 中国からの地下教会牧師ら参加者200人がケープタウンに向かう空港で、当局から出国許可が下りず出席を断念した。このニュースによってこの会議の意義が世界に伝えられ注目された。中国の福音主義クリスチヤンの人口はアフリカに次いで世界第二位となっており、このたびの会議への彼らの参加を歴史の転換点になるものと捉えられていた。しかし、21世紀にも宗教活動について繊細な自制と配慮が必要である国が多くある

ことを認識する機会となった。

2. 全世界の十万人のもとへ、ケープタウンの会議を同日中継し、また世界からのフィードバックを会議に活かす双方向通信をすることになっていた。しかし、何者かによるネットワークへのハッキングの被害に会い、最初の48時間は回線が不通になってしまった。そこに、インドからのダニエル・シング氏とBJ クマル氏の二人が問題を解決、自分にできることで神の栄光と人々の助けになったことを感謝する、と喜んだ。

第三回ローザンヌ世界宣教会議の意義

1. 励まし：福音派の宣教の取り組みの回復

世界教会協議会が6月に開催した宣教会議は、折からのリーマンショックの影響を受けて、大幅に規模を縮小したという。一方、ケープタウンには予定通り5000人規模の会議を開催できた。

第三回ローザンヌ世界宣教会議の開催は、一時期世界的に下火になっていた福音派諸教会の世界宣教の命が再び息を吹き返したという、喜ばしい意義があった。

その喜びは主催者にも見られるもので、宣教の前進には課題は多く、苦しみを強いられている。その中でこそ主のみわざを見て共に喜んでいこうという明るい雰囲気がセレブレーション色の強い会議に漂っていた。

これまでの若々しい聖霊派諸教会の躍進の陰にあって、運動として先にスタートしていた福音派諸教会は既に発展期を終えて成熟期に入っているような、得体の知れない閉塞感と無力感をここ15年ほど覚えてきた。ローザンヌ世界宣教運動の蘇生にはこの自己像を変革するほどの影響力がある。

福音主義には信仰を主觀的、また感情的な軸で理解する傾向があるとしても、宣教を地に足のついた落ち着いた取り組みとしてこの会議が捉え直したこと、1990年ころから目立つようになった、宣教にまつわるどこかヒステリックな空気を払拭できたことは世界的に大きな貢献である。

2. 再出発：謙遜と協力

この会議で、謙遜、ということばがよく用いられた。そこには、華々しくドラマチックな働きではない、落ち着いた宣教への関心の回帰がある。経済的、人材的、資源的、施設的豊かさを必ずしも持ち合わせなくても伝道はできる。宣教はクリスチャンとしての生き方であって、熱心な人々のみの付加的な趣味ではない。

苦しみの神学、十字架の神学こそ、聖書の神学であり、宣教の神学であることへの落ち着いた気づきがこれから私たちを支えることになる。

私たちの歩むべきは、謙遜に、人としての成熟に向かい、時間をかけて、単純な福音を

宣教する道である。他の人と勝敗を競うのではなく陣地の争奪でもない。成功物語を創作し、虚偽の統計を発表しなくてもよい。人々のどん欲をかきたてるような間違った宣教のあり方を悔い改め、むしろ仲間を心にかけ、尊重しつつ、共に十字架を負って歩んでいくことを学ぶ。

このたびの宣教会議は、はじめて世界福音同盟の協力で開催された。これは実は画期的なことである。1974年第一回ローザンヌ世界宣教会議以来、ローザンヌ世界宣教会議の成果は世界の福音派諸教会のメンバーシップをもつ世界福音同盟を通して継続的に諸教会に実らせていくことが願われてきた。しかしながら諸般の事情でこれが実現しないまま35年余のときを経ている。現在のローザンヌ運動の総裁にダグ・バーゼル氏、現在の世界福音同盟の総裁にジェフ・タニクリフ氏が選出されたとき、ふたりは祈りつつこれまでの相互の関係を見直し、福音の前進のために協力体制を創出していくことを約束したのだろう。

もっているものを出し合って、心を合わせて宣教の苦労と喜びを味わう宣教の原点がここにある。難しい理論や、ややこしい組織間の関係ではなく、主イエス・キリストの救いと、そこから生まれる愛が神の国の発展という宣教の豊かな原動力なのである。これらふたつの働きが競合せず共働するとき、教会の組織的なつながりをしっかりと持つ世界福音同盟と、危急の問題に立場や前例に支配されずに取り組むローザンヌ世界宣教運動が、それぞれ横軸、縦軸となって強靭な福音派の前線を形作ることになった。

3. ネットワーク：世界への窓

ケープタウンでは、参加者が世界宣教の神学的・実践的動向を知り、世界にネットワークをつくることができた。すべての参加者に、この会議は自分の会議だと意識された。

この最大の理由はテーブルグループの充実である。4000人の参加者が6人一組のテーブルグループに割り振られた。訓練を受けたグループリーダーが会期中のグループ内の双方向の交わりを促進した。参加者は大人数の会議でよくみられる特有の寂しさやおそれには支配されることがなかった。グループ内で信頼関係を深めつつ、会議での学びを共有して祈りあう共同体となった。グループリーダーは事前に各国の参加者から700人が募集され、会議の前日に緻密な訓練を受けた。日本からは13名が奉仕した。

1989年の第二回ローザンヌ世界宣教会議では教会や団体が宣教協力の相談をし、350の新しい世界大の協力関係が成立した。ケープタウンではテーブルグループによって世界大の宣教ネットワークを更に細かく網の目のようにつなげた。会議で一番恵まれたのは、お世話をすることでこの働きの力を目の当たりにしたグループリーダー達だった。

人を知ると、その国の事情がより身近に感じられる。世界への広がりは、今お仕えしている会衆へのより行き届いた配慮のために有用である。また、福音を必要としている人々の具体的な有様や宣教の可能性などを知ることができる。統計で知るのではなく、生身の

人間のかかわった身近な祈りの課題として、宣教の必要を知ることができる。どのような人々が関わっているのかを知り、自分たちの関わり方を考えることができる。

世界を知る窓は、日本の文化や国を考える窓でもある。日本は特殊だから伝道が進まないと諦めることはない。宣教の行き詰まりは日本文化のかたくなさだけではなく、国家的な反キリスト教的姿勢にも原因がある。そうであれば一神教ではユダヤ教やイスラム教が実質には0%の国に、1%前後の人口を有しているキリスト教の強さを見ることもできる。即効性のある伝道法はなくても、時間をかけて、人々を根底から作り変える福音を伝えていこうではないか。私たちは主イエス・キリストの救いを、全教会をあげて全世界に伝えしていく、苦労と喜びの共同体なのだから。

これからのローザンヌ運動

世界ローザンヌ運動

この宣教会議で、福音主義諸教会は悔い改めを迫られた。宣教をはばむ問題はまず教会の姿勢にある。多数の指導者をむしばむ金欲、名誉欲、社会的弱者に対する敬意の欠落がある。ケープタウン会議は、失われた人々への情熱を失い、諦めと近視眼的こだわりに生きる教会の在り方に、大きなチャレンジを与える。

会議の成果として「ケープタウン決意表明」という文書が発表された。主に対する愛の応答としての信仰の姿勢を表明する第一部、世界に仕える行動への決意を表明する第二部からなるが、会議では第一部草案が発表され、会場で回収されたアンケートや公式コミュニケーションサイトのローザンヌ・グローバル・カンパセーションなどを通して意見を集め、第二部とともに正式版を作成する。これは11月末までにローザンヌ運動と世界福音同盟のホームページで発表される。

また、会議のフォローアップの集まりやプロジェクトが今後ハカ月以内に世界各地で行われる。世界ローザンヌ委員会は縮小し、特に若い指導者の発掘や育成には常に取り組みながら、会議のフォローとローザンヌ運動でなければ取り組めない働きに重点的に携わっていく。会議の成果に周知していく方向性も考えられており、たとえばローザンヌ運動に属する委員会は世界福音同盟の呼応する委員会と合同していくものもあるとのことである。

アジア・ローザンヌ運動

世界ローザンヌ委員会が第三回ローザンヌ世界宣教会議の開催準備を機に世界を12の地区に分けて、各地の活動を活性化させた。アジアには日本の属する東アジア、そしてユラシア、東南アジア、南アジア、南太平洋の五地区が属する。

1974年の第一回ローザンヌ世界宣教会議は、各方面に大きな宣教のうねりを作りだ

した。そのひとつとして、アジア特有の文脈を認識して自分たちの手で宣教を担うためアジア・ローザンヌ委員会が生まれた。この委員会が主催する第七回アジア・ローザンヌ宣教会議が2011年6月1日から4日までモンゴルのウランバートル大学で行われる。日本ローザンヌ委員会では参加者を募集している。

日本ローザンヌ運動

日本ローザンヌ委員会は、今回の会議に向けて国内の参加者推薦母体として2008年12月に再発足し、今会議の終了をもって当初の役割を果たした。主のこれまでの導きを感謝するとともに、これからは継続して活動し、委員数を増やして、第三回ローザンヌ世界宣教会議の成果を日本の教会に還元していく働きや、アジアや世界のローザンヌ運動と日本の教会の架け橋の働きを担っていくこととなった。すでに「ケープタウン決意表明」の公式日本語訳の翻訳、独自のホームページの準備などが始まっている。

付録：ローザンヌ運動の歴史

1910年のエジンバラ宣教会議は近代の世界宣教運動の結束を促し教会に力を吹き込んだ。プロテスタント、カトリック、東方教会が一致して世界宣教の達成を目指す出発点にもなった。

そこでは8つの主題が話し合われた。①異教世界への福音、②宣教地の教会形成、③宣教と教育、④宣教と他宗教との関係、⑤宣教師の養成、⑥宣教の基盤としての教会、⑦宣教と政治との関係、⑧宣教の協力と一致である。

そして「継続委員会の設置」、「キリスト教協議会の発足」、「国際宣教協議会の設置」を決議した。その結果、1921年に国際宣教協議会が、1948年に世界教会協議会が発足した。

【第一回ローザンヌ世界宣教会議】

世界教会協議会に連なる主流教会は合理主義的色彩の強い神学にいじめられていく。聖書正典論や救済論が後退し、被抑圧者や困窮者の社会的救済や人権擁護などが宣教の中心となっていく。この傾向を憂う世界の福音派諸教会の祈りは1974年にローザンヌ世界宣教会議として結実した。イスのローザンヌに150カ国から福音派教会の指導者が集った。その主要な貢献は三点である。

第一に、「ローザンヌ誓約」である。起草者ジョン・ストットらは福音的宣教の使命を明文化した。「ローザンヌ誓約」はその後福音派教会の宣教に関する考え方やあり方に大きな影響を与えてきた。また福音派諸教会の相互協力の土台として、用いられてきたのである。

第二に、「未伝の人々の発見」である。当時世界教会協議会は、既に世界の全国家に教会は存在するのでこれ以上の宣教師は不要であると発表していた。

第三の貢献は、ホリスティック、包括的な宣教理解の再発見である。

ローザンヌ世界宣教会議は一回限りの会議で終わらず、そこから「ローザンヌ世界宣教委員会」が構成されローザンヌ世界宣教運動として引き継がれた。出版、セミナー、国際会議などを通して、福音派諸教会を結ぶ大きな運動体となって世界の福音宣教を励ましてきた。ローザンヌ世界宣教運動は触媒のような働き、すなわち、すでにあ

る宣教の取り組みの数々が出会うネットワークの場を提供する。

都市部伝道、児童伝道、イスラム伝道、ユダヤ人伝道、メディア伝道などの宣教分野ごとの交わりも多く設立された。また、アジア、アフリカ、ヨーロッパというような地域別の交わりも展開されてきた。

【第二回ローザンヌ世界宣教会議とその後】

ところが、ローザンヌ世界宣教運動は1989年にフィリピンのマニラでもたれた「第二回ローザンヌ世界宣教会議」以降一時混迷し力が分散され失速した。一部の派生運動は活発に継続されたが、「ローザンヌ世界宣教委員会」の動きは目立たなくなり、21世紀を迎えた。

2004年にローザンヌ世界宣教委員会の総裁に就任し、第三回ローザンヌ世界宣教会議の大会会長としても働いたダグラス・バーゼル氏はマニラでの宣教会議を振り返って以下のような厳しい評価を下している。「第二回ローザンヌ世界宣教会議は神学の点で十分な取り扱いが行われなかつた。第三ミレニアムの到来という節目を前に、20世紀末までにいくつかの宣教のタスクを終えようとして浮き足立つてしまつた。」

さて、2004年にローザンヌ世界宣教運動の再起と2010年に向けての準備運動のため、「ローザンヌ・フォーラム2004」がタイのパタヤで行われた。日本福音同盟とよい関係の中で関西ミッションリサーチセンターは「ローザンヌ・フォーラム2004」に日本からの参加者を募り、約20名の方々が参加した。会期中に今後のローザンヌ運動情報や相互の情報交換のための「ローザンヌ・ネットワーク・ジャパン（LNJ）」を発足し、連絡所が関西ミッションリサーチセンターに置かれた。

また、関西ミッションリサーチセンターは2007年に、「ローザンヌ・フォーラム2004」の成果であるローザンヌオケージナルペーパーズの日本語版権が与えられ、翻訳出版の第一弾として「世界のユダヤ人伝道の今後」が出版された。2009年には「靈の戦い：ナイロビ宣言の学び」が出版された。

ローザンヌ運動に二つの特徴がある。ひとつは宣教に関することからへの集中である。教会のわざには様々あるがその中で宣教に集中した学びと実践の交わりである。もうひとつは運動に加わる人々が教会や団体の代表ではなく関心を持つ個人であることである。日本からの参加者を選定するとき、会議後の健全な普及を考え、教会の祝福となるような過程が必要であった。世界ローザンヌ委員会は各国に参加者推薦の窓口が設けられることを期待していたので、第三回ローザンヌ世界宣教会議への日本からの参加者が教会の信頼を得ることができる人々で構成されることを目的に2008年の12月1日、日本ローザンヌ委員会が再発足した。同委員会は2010年の会議をもって一応の使命を全うしたが、会議後の国内運動継続と対外的交わりの窓口として委員会を拡大継続することになった。

第三回ローザンヌ世界宣教会議の情報は、www.lausanne2004.orgから数カ国語で入手することができる。このサイトは非常に充実している。しばらく間は、おびただしい数のビデオ、写真、論文などの資料がアップされている。日本の情報は日本ローザンヌ委員会から発信される。日本ローザンヌ委員会は、現在ホームページを改訂中である。お問い合わせ等のメールは、roozannu@gmail.comまで。